

居敷遺跡発掘調査報告

—鈴鹿市津賀町字居敷所在—

1996. 3

三重県埋蔵文化財センター

序

旧伊勢国鈴鹿郡は、特に古墳時代から平安時代までの間に大変栄えた地域であります。古墳時代には前方後円墳をはじめとした多数の古墳が造られていますし、奈良～平安時代には律令国家による伊勢国統治の拠点である国府も置かれていました。今でも鈴鹿市は、三重県下における北勢地域の重要な都市として、その名は海外にまで広く知られているところであります。

今回調査が実施されました鈴鹿市津賀町字居敷地内にある居敷遺跡は、本文中でも述べられているように、当初は「居敷1号墳」の調査として開始いたしました。ところが、それは古墳ではなく、その盛土の下から縄文～室町・戦国時代にかけての多種多様な遺構・遺物が見つかりました。調査の面積こそ狭かったのですが、このような多様なものが見つかるところからも、この地域が古来より重要な場所であったことを物語っています。

調査した場所は、残念ながら道路の建設によって消滅します。地域振興のための道路作りも大変重要な事業なのですが、その路線下には、我々の祖先がつけてきた足跡があるわけで、その足跡なくして今日あるいは未来の発展はあり得ないわけです。その意味からも、このような成果を基に、地域の方々、ひいては県民の方々にも文化財保護への関心がより強く根づくのであれば、これに勝る喜びはありません。

調査に際しましては、鈴鹿市在住の皆様方、鈴鹿市教育委員会をはじめ、県土木部道路建設課・鈴鹿土木事務所の関係各位からは、多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。調査の成果はひとえにこれらの方々の文化財保護への深い御理解にあります。文末とはなりましたが各位の誠意あるご対応に心からの御礼を申し上げ、冒頭の挨拶といたします。

1996年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 川村政敬

例　　言

1 本書は、一般地方道辺法寺加佐登停車場線国補道路改良工事に伴い、緊急発掘調査を実施した、鈴鹿市津賀町字居敷地内に所在する居敷遺跡の発掘調査報告書である。

2 調査は平成7年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

技師 伊藤裕偉 主事 西出 孝

3 当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行い、以下の方々の援助・協力を得た。写真は、遺構関係を伊藤・西出が、遺物を伊藤裕偉が撮影した。執筆及び全体の編集は、伊藤裕偉が行った。

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、枯原清子、川口 愛、井田奈美子、楠 純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、富楽幸子、中川卓世、中山豊子、西村秋子、浜崎佳代、早川陽子、堀内博子、松本春美、松月浩子、森島公子、柳出敬子

4 調査にあたっては、鈴鹿市津賀町周辺在住の各位、鈴鹿市教育委員会、および県土木部道路建設課・鈴鹿土木事務所から多大な協力を受けたことを明記する。

5 報告書作成にあたっては、大川勝宏氏（奈宮歴史博物館）、奥義次氏（三重県立松阪高等学校）、藤原秀樹氏（鈴鹿市教育委員会）、永井宏幸氏（財愛知県埋蔵文化財センター）、新田剛氏（鈴鹿市教育委員会）、前田清彦氏（豊川市教育委員会）のご教示を得た。

6 掘団の方位は、全て真北で示している。なお、磁針方位は西偏 $6^{\circ}40'$ （平成6年）である。

7 写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

8 当報告書での用語は、以下の通り統一した。

つき……………「坏」があるが、「杯」を用いた。

わん……………「椀」「碗」「塊」があるが、「椀」を用いた。

9 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I	前言	(1)
1	調査の契機	(1)
2	調査の経過	(1)
3	遺跡の名称について	(2)
4	調査の方法	(2)
II	位置と環境	(3)
III	調査の成果—層位と遺構	(7)
1	基本層位	(7)
2	遺構	(7)
IV	調査の成果—出土遺物	(15)
1	縄文時代の遺物	(15)
2	弥生時代の遺物	(15)
3	古墳～飛鳥時代の遺物	(15)
4	平安時代の遺物	(15)
5	鎌倉～戦国時代の遺物	(16)
V	調査のまとめと検討	(19)
1.	縄文時代晩期の遺構と遺物について	(19)
2.	弥生時代の遺跡について	(19)
3.	古墳時代前期の遺構と遺物について	(20)
4.	古墳時代後期～飛鳥時代の遺構と遺物について	(20)
5.	平安時代の遺構と遺物について	(20)
6.	中世の遺構について	(20)
	報告書抄録	(22)

写 真 図 版 目 次

P L A T E 表紙	S X16	P L. 9	S X16
P L. 1	調査前風景	P L. 10	S H 7
P L. 2	「居敷1号墳」	P L.11	S D 5・調査風景
P L. 3	東調査区下層全景	P L.12	S D17・S Z18・S K11
P L. 4	S X 3	P L.13	S X 8
P L. 5	S D 4・S X22	P L.14	出土遺物1 繩文土器
P L. 6	西調査区全景	P L.15	出土遺物2 繩文土器・古式土師器
P L. 7	S K 9	P L.16	出土遺物3 須恵器・黒色土器他
P L. 8	S X21		

挿 図 目 次

fig.1	居敷遺跡とその周辺の遺跡群	(4)
fig.2	居敷遺跡周辺地形図	(5)
fig.3	調査区平面図	(6)
fig.4	調査区各土層	(8)
fig.5	土器棺墓 S X16平面・立面図	(9)
fig.6	土坑 S K 9・土器棺墓 S X21平面・断面図	(9)
fig.7	中世墓 S X 8 平面・断面図	(9)
fig.8	竪穴住居 S H 7 平面・断面図	(11)
fig.9	溝 S D 4・土器棺墓 S X22平面・断面図	(11)
fig.10	木棺墓 S X 3 平面・断面図	(12)
fig.11	掘立柱建物 S B23平面・断面図	(13)
fig.12	出土遺物実測図(1)	(16)
fig.13	出土遺物実測図(2)	(17)

表 目 次

tab.1	検出遺構一覧表	(14)
tab.2	出土遺物観察表	(18)

I 前 言

1 調査の契機

鈴鹿市津賀町付近は、国道1号線が南方を走り、また東名阪自動車道鈴鹿インターへのアクセス道路もあるため、比較的交通の便が良いように見える。しかし、実際にこの付近はこれらの幹線道に挟まれた地帯であり、いざれの道に出るためにも大きな迂回を余儀なくされている。また、鈴鹿市街地から鈴鹿インターへと至るための道路も整備が行き届いておらず、大型車も比較的狭い道を用いながらの交通であった。

このような交通事情の下に、地域振興の一環として一般地方道辺法寺加佐登停車場線が設置されるに至った。そのため、津賀町字居敷地内の文化財調査が必要となったのである。

2 調査の経過

a 調査の経過

今回の道路改良事業予定地内においては、すでに居敷古墳群の存在が確認されており、このうち、今回の事業予定地内には1号墳（県遺跡番号10091、市915）が該当することになった。そのため、その範囲を確定するために、平成6年3月に当センター調査第一課第2係長泉雄二・主事服部芳人を担当者として試掘調査を実施した。その結果、出土遺物こそなかったものの、居敷1号墳とされた部分が盛土で構築されたものであることが判明し、260m²が調査対象範囲として認識されるに至った。

この結果をもとに、平成7年6月12日から、伊藤裕作・西出孝を担当として調査にあたった。ところが、試掘調査時点において古墳と考えられた部分の下部に、鎌倉時代以前の遺構の存在することが明らかとなった。このため、当初「居敷1号墳」と認識していた部分が、古墳ではないことが判明したのである。

さらに、「居敷1号墳」下部の遺構が確認されたことにより、当初遺跡範囲外として取り扱ってきた、「古墳」とは水路を挟んで西側の部分への遺跡の広がりが懸念されるに至った。そのため、再度鈴鹿土木事務所と協議を行い、その部分の試掘調査を行ったところ、予想どおり遺跡の広がっていることが確

認された。そこで、再々度の協議を鈴鹿土木事務所と行い、「古墳」西側の箇所についても今回継続して行うことで合意し、調査を続行した。

以上の経緯によって調査は同年8月9日に終了した。最終的な調査面積は590m²であった。

現地は、普通乗用車がどうにか通れるほどの狭い道の奥にあり、道具の搬入・搬出等でかなりの苦労を強いられた。また、比較的まとまった梅雨の後に近年にない猛暑が訪れ、35°Cを越える日々が連日続き、大変な調査となつた。それでも無事に調査を終えることができたのは、関係各位の誠意ある御対応の賜物といえる。ここに、作業にあたつていただけた方々の御芳名を記して感謝の意を表します。

麻生利一、亀田八重、小西ミサエ、小仏せつえ、田中重雄、田中久代、中條秀子、鎮西ノブ、鎮西操、辻内久雄、中垣内きぬあ、南条公子、南条巳代子、森川匡（順不同、敬称略）

b 調査日誌（抄）

- 6月12日 道具搬入、標高点移動。
6月15~16日 「居敷1号墳」の調査前測量（西出孝・竹田憲治・日栄智子）。
6月23日 作業開始。墳丘部分から須恵器片出土。古墳の可能性が高いと考えられた。
6月27日 周溝相当部分の墳丘側の立ち上がりが不鮮明。悩む。
6月28日 周溝相当と考えた部分の断ち割りの結果、下層遺構の存在が濃厚に。
6月29日 作業続行するも、古墳に関する明快な知見は得られず、古墳の可能性は低いと判断した。
7月3日 墳丘相当部分の調査後測量（杉谷政樹・伊藤裕作・山田康博）。
7月4日 「墳丘」断ち割りにかかる協議を鈴鹿土木事務所と行う（杉谷・伊藤）。
7月7日 「墳丘」土層図の作成。
7月10日 墳丘相当部分の重機掘削。下層の存在を確認。
7月11日 「墳丘」下層の調査開始。弥生土器・須恵器等含む。はじめてまともに土器出土。東調査区と平行して、西調査区に試掘トレ

ンチを入れる。この部分にも遺構を確認。

7月12日 SD 1から鎌倉時代の土器が出て、「居敷1号墳」が古墳ではなかったことが確定。

木棺墓SX 3を確認。SD 4から「パレススタイル壺」出土。

7月13日 西調査区の取扱い協議を鈴鹿土木事務所と行う（山田猛・杉谷・伊藤）。東調査区SZ 4ほかの実測、遺物取り上げ。

7月18日 西調査区の表土の重機掘削。古式土師器を中心とした遺物少量。

7月19日 西調査区の地区杭設定。

7月20日 f3グリットに土器棺墓確認。

7月24日 妻まじい暑さ。SK 9から打製石斧出土。

7月25日 妻まじい暑さが続く。作業ベース大幅に落ちる。

7月26日 やはり妻まじい暑さ。SH 7が堅穴住居と判明。

7月27日 うんざりするほど暑い。SK 16が土器棺墓と判明。

7月28日 今日も暑いが少し風がある。SK 11に黒色土器の良好なもの有り。SK 8の実測。

8月1日 遺構全体の清掃、写真撮影。

8月2日 遺構実測図作成（杉谷・伊藤・木野本和之・筒井正明）。

8月9日 鈴鹿土木事務所へ引き渡し。

c 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」と呼称）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官あて等に行ってい
る。

- ・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
- 平成7年5月10日付け道建第607号（県知事通知）
- ・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
- 平成7年5月1日付け教文第834号（県教育委員会
教育長通知）
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（鈴鹿警
察所長あて）
- 平成7年11月13日付け教文第222-64号（県教育委員
会教育長通知）

3 遺跡の名称について

a 居敷1号墳について

当初調査の契機となった「居敷1号墳」について

は調査の結果、古墳ではないことが判明したため、抹消することとする。但し、報告書記述の便宜上、当報告書ではこの盛土部分を「古墳」や「墳丘」、「居敷1号墳」とカッコ付きで記述しておく。

b 居敷遺跡について

「古墳」の下部から検出された遺跡については、「古墳」西側の調査区も含めて字居敷地内であるため、居敷遺跡として呼称・把握することとする。遺跡の範囲については、地形と遺物散布の状況から、fig. 2の部分として把握する。

4 調査の方法

a 小地区設定について

今回の調査では、西調査区については調査区内を4m四方の枠目で切ることによって小地区を設定した。東調査区については、面積が狭いこともあり、小地区設定は行わなかった。西調査区は、西からアルファベット、北から数字を付け、枠目の北西隅の番号をその小地区的符号とした。なお、この小地区設定は座標軸とは全く無関係である。

b 遺構図面について

調査区全体の平面図は、西調査区は1/20で、東調査区下層は1/50で、それぞれ作成した。また、個々の遺構のうち、土器の出土等が明瞭なものについては、個別に1/10の実測図を作成したものもある。

なお、「居敷1号墳」については、調査前後にそれぞれ1/100の平板測量を行っているが、今回の報告では割愛した。

c 遺構番号等について

遺構番号は、西・東調査区をまとめて通し番号とした。遺物の取り上げもこれに準じているが、中には番号を新たに付加したものもある。これらはtab. 1の遺構一覧表に対応関係を明示している。なお、「居敷1号墳」の調査段階で出土した遺物については「居敷1号墳」として注記を行っている。

今回検出した遺構は、見た目の性格によって頭に付ける略記号を以下のように付加した。

S B………掘立柱建物 SD………溝

S H………堅穴住居 SK………土坑

S X………墓 pit………ピット・柱穴

S Z………落ち込み・

土坑群等

II 位置と環境

居敷遺跡は、今回の調査によって新たに発見された遺跡である。この遺跡は、鈴鹿川左岸に広がる低台地の上に位置し、標高は約43m前後である。同一丘陵上には、伊勢国府跡と確定された長者屋敷遺跡や数多くの古墳群がある。旧都では鈴鹿郡に相当し、近代の津賀村・高津瀬村に含まれている。

当遺跡の周辺を見ると、同一丘陵上の東側にあたる岡崎遺跡から石棒の出土が伝えられており^①、当遺跡のような立地が縄文時代においても決して不都合な状況にないことがわかる。

弥生時代では、当遺跡の南側に下代遺跡^②がある。下代遺跡は、居敷遺跡の占地する丘陵の西側にあたる丘陵が鈴鹿川に向かって下降・沈下する部分に立地する。また、下代遺跡のさらに南の鈴鹿川がかつて形成した自然堤防上と考えられる場所にも弥生時代の遺跡として中富田西浦遺跡が確認されている。このように、丘陵端部（居敷遺跡）・丘陵裾（下代遺跡）・低地（中富田西浦遺跡）という3様の立地の遺跡が同一地域内で近接して確認されたことは、今後の弥生時代集落を考える上で重要な提言をすることとなろう。

古墳時代では、前期に相当するものとしては近隣の加佐登神社境内に所在する白鳥塚1号墳を無視できない。この古墳はやや歪な直径約59mの円墳で、横穴式石室を有する可能性も残るもの、出土している埴輪などからは前期のものではないかと考えられている^③。また、3.2m西には全長約89mの前方後円墳・能褒野王塚古墳がある。ここからは鱗付朝顔形埴輪が出土しており、畿内中枢部との関連を強く意識させる^④。このように当該地域周辺は、前期古墳が占地できる、すなわち、古墳時代前期における有力者を輩出できるような環境下にあることが充分推定されるのである。

古墳時代後期には、この低丘陵上に多数の古墳が構築されている。居敷遺跡の西側・下代遺跡の上部丘陵には蟻越古墳群・津賀古墳群が形成されている。また、居敷遺跡の東側でも坊主山古墳・綺宮古墳群などが認められる。居敷遺跡の占地する丘陵は、巨視的には、近年の調査で次第に明らかになりつつある、方墳によって形成された石薬師東古墳群（東方

約4.5km先）などの丘陵とも同一であり、この丘陵上に形成された古墳群を大きな目で把握していく必要もある。

古墳時代前期から後期の集落として、居敷遺跡の北方にあたる場所に津賀平遺跡がある。周辺古墳群との関連が注目される。

また、居敷遺跡の北方約2kmには北野古墳^⑤があつた。7世紀初頭頃の横穴式石室を埋葬主体とする当古墳は、時期的には古墳時代に含めるべきかも知れないが、重要なのは、無文銀鏡を出土したことである。和同開珍以前の通貨とも、秤量の機能をも有していたともされるこの遺物は、律令国家成立期の経済機構の一端を示すものとして重要視できるが、このような遺物がこの地域で出土することも極めて特徴的なことといえる。

奈良～平安時代には、居敷遺跡の西方に長者屋敷遺跡が形成される。この遺跡は伊勢国府跡と目されるところで、政府周辺には方格地割が形成されていたことも確認されている^⑥。伊勢国分寺瓦窯と目される川原井瓦窯跡群^⑦も近隣に所在する。また津賀平遺跡が繼續して形成されている。津賀平遺跡からは平安時代頃と考えられる八稜鏡や石帯が出土しており、広義の律令期における中心的な集落であったものとみなすことができよう。

中世の動向は今ひとつ判然としないが、後期には津賀町集落の西方に津賀城跡が築かれている模様である。この地域の中世後期は、位置的には国人領主・閑氏関連の領主による領有が想定され、城館のあり方も国人領主・閑氏のあり方と関連させて検討する必要がある。

この他に、加佐登町内で確認された椎山中世墓が重要な成果をもたらしている。丘陵斜面に数列の段を構築することで墓域を設定していたこの墓群は、集石による区画や五輪塔なども有しながら、瀬戸・常滑の中世陶器類を中心とした蔵骨器を用いていた。この段単位のあり方から、同一墓群を形成するなかにも一定の階層差とも考えられそうな状況が見いだされている^⑧。上記の領主権力の動向と絡め、このような広義の被支配者層の動向を知る上で重要な成果も次第に蓄積されているといえる。

以上、居敷遺跡周辺における遺跡のあり方を一瞥してきた。以上のことから当遺跡周辺は～特に古代において～旧伊勢国の中でも際立って重要な場所であったことが認識されるのである。

註

- ① 新田剛氏（鈴鹿市教育委員会）の御教示による。
- ② 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報』6 (1995)
- ③ 『鈴鹿市史』第1巻(1980)
- ④ 三重県教育委員会・龜山市教育委員会「龜山の古墳」(1988)
- ⑤ 仲見秀雄・伊藤久嗣ほか『三重用水加佐登調整池関係道路発掘調査報告』(鈴鹿市教育委員会ほか 1978)
- ⑥ 註②と同じ
- ⑦ 伊藤久嗣「三重原川原井瓦窯跡」(『日本考古学年報』33 1983)
- ⑧ 鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』II (1995)
- ⑨ 註⑤と同じ

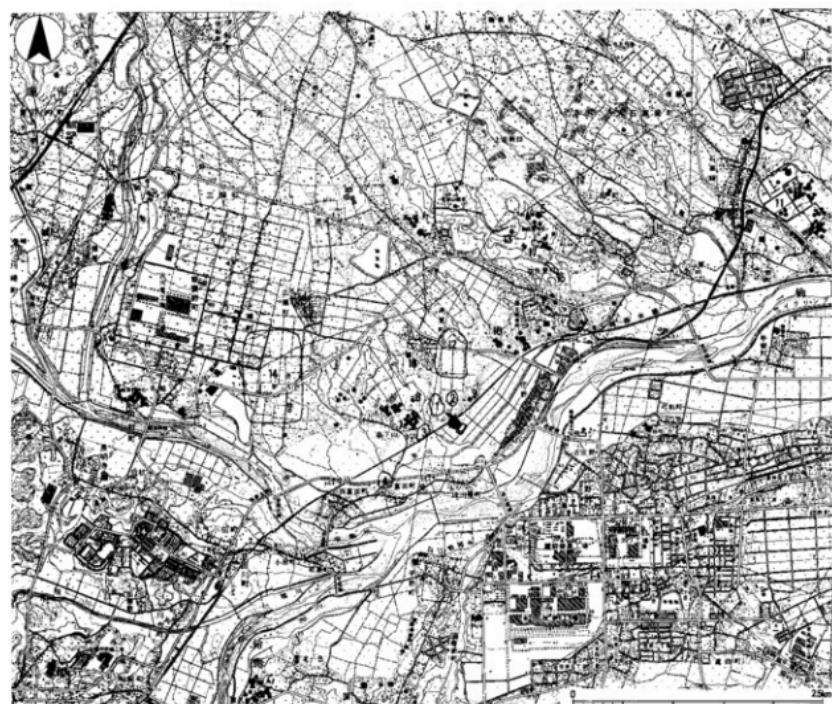


fig. 1 居敷遺跡とその周辺の遺跡群 (1 : 50,000) 国土地理院 1 : 25,000 「鈴鹿」「龜山」を使用

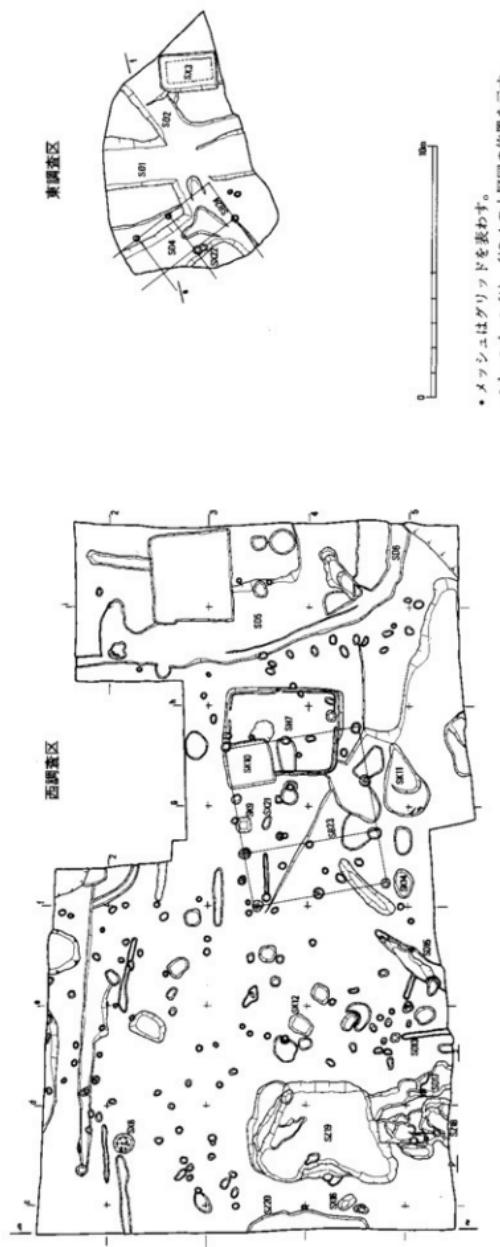
● は古墳 (方墳を含む) ♪ は前方後円墳 ■ は城館跡

- 1. 居敷遺跡 2. 岡崎遺跡 3. 下代遺跡 4. 中富田西浦遺跡 5. 白鳥塚1号墳
- 6. 能褒野王塚古墳 7. 蛍越古墳群 8. 津賀古墳群 9. 坊主山古墳 10. 綺宮古墳群
- 11. 石薬師東古墳群 12. 津賀平遺跡 13. 北野古墳 14. 長者屋敷遺跡 15. 川原井瓦窯跡群
- 16. 津賀城跡 17. 推山中世墓群



fig.2 居敷遺跡周辺地形図 (1:2,000) 粗点ドットは遺跡範囲、密点ドットは今回の調査区。

fig.3 調査区平面図 (1 : 200)



・メッシュはグリッドを表わす。

・a-b, c-d, e-fは、fig.4の土層図の位置を示す。

・東調査区は、下層遺構のみを表示。

III 調査の成果

—層位と遺構—

1 基本層位

調査区は、標高約43mの丘陵端部に位置するため、沖積地のような堆積が全く認められない。近隣に所在する長者屋敷遺跡（鈴鹿市広瀬町周辺）では、表土直下に黒褐色系の粘質土（いわゆる黒ボク）の堆積が認められるが、今回の調査区内では原則的には見られなかった。

調査区は現道と水路を挟んで2ヶ所に分かれており、層位的にも若干の相違がある。

西調査区　ここでは、標高の高い北端で、現表土のほぼ直下にて明赤褐色系の疊混じり粘質土（基盤層）に至る。この基盤層は北東から南西方向に向かって漸次下降し、その上部に淡褐色系粘質土の堆積が認められるようになる。この層が基本的に遺物包含層に相当すると考えられるが、含有量は概して少ない。

調査区の南西部では、上記包含層の上に、表土から約1mほどの堆積土が認められる。fig. 4に示したように、後述する遺跡の形成後、棚田状水田の形成されていたことが土層の観察から想定される。この棚田は、おそらく江戸時代頃のものであろう。つまり、調査区南西部に厚い堆積土の見られる要因とは、これら水田経営が進行し、棚田状の水田を主に盛土による整地によって造成していったためと考えができる。したがって、上述の遺物包含層の遺物が概して希薄であるのはこのような事由によるものと考えられ、それが当遺跡の存在をこれまで気付かせなかつたのであろう。

東調査区　ここでは、当初「居敷1号墳」として取り扱っていた高まりが、西調査区の表土に相当するレベルから盛られている。この盛土の最高部は標高約46mで、土層断面図（fig. 4）に見るよう、確かに円墳状となり、最高部で約2.3mほど積まれている。しかし、頂部には今回の調査区では面的な広がりとして全く捉えられなかった黒ボクが不自然な状態で盛土中に入り込み、また、当然のことながら盛土中央に埋葬施設の遺構の検出を見ることはできなかつた。盛土は、その下部から検出された遺構の最も新しいものが鎌倉時代中頃であるため、それ以前に造作されたものと見られる。

なお、この盛土はこの「居敷1号墳」から東へ數十mほど伸び、鈴鹿川側の南は急峻な斜面を形成している（fig.2参照）。この付近から中世と考えられる遺物（fig.13-37）を表面採集しているため、この盛土の当初が、近代の開墾によるものではなく、城館に伴うものである可能性も残されている。この点については後述する。

盛土の下は、東調査区北壁からおよそ1mほど南のところまで旧耕作土と思われる層が堆積しており、SD 2付近までは達せずに終息する。鎌倉時代の遺構はこの層直下から切り込まれるが、弥生～古墳時代の遺構面に至るまでは暗褐色系粘質土が数cmほど堆積している。

2 遺構

今回の調査によって検出した遺構は、縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・鎌倉時代・室町～戦国時代のものがある。ただし、各時代とも個別分散的なあり方で、あまりまとまった状態ではない。以下、主な遺構について時期別に記述を行い、他の遺構については別に掲げる遺構一覧表を参照していただくこととする。

a 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構には、土坑・土器棺墓がある。

土坑SK9（fig. 6）　西調査区で検出した遺構である。検出時には調査区内でも比較的平坦な部分に相当するが、削平のためであろう。0.65m四方の隅丸方形で、断面形は底の丸い逆台形となる。深さは検出時の状態で約0.3mである。埋土は淡茶灰色系粘質土で、下部に若干の炭を含んでいた。ただし、土坑壁に被熱の痕跡は全くない。底から若干浮いた状態で打製石斧があり、その上部には拳大ほどの礫数個と棒状の礫があった。土器は図示できるものとしては深鉢と思われる底部があるが、その他は細片でしかも器壁が剥落している。時期の判断は難しいが、後～晩期までの範囲で把握るべきであろうか。

土器棺墓SX16（fig. 5）　西調査区の南西隅付近で検出した遺構である。やはり深鉢を用いた墓で、後世の削平のために口縁部が一部欠損する。残

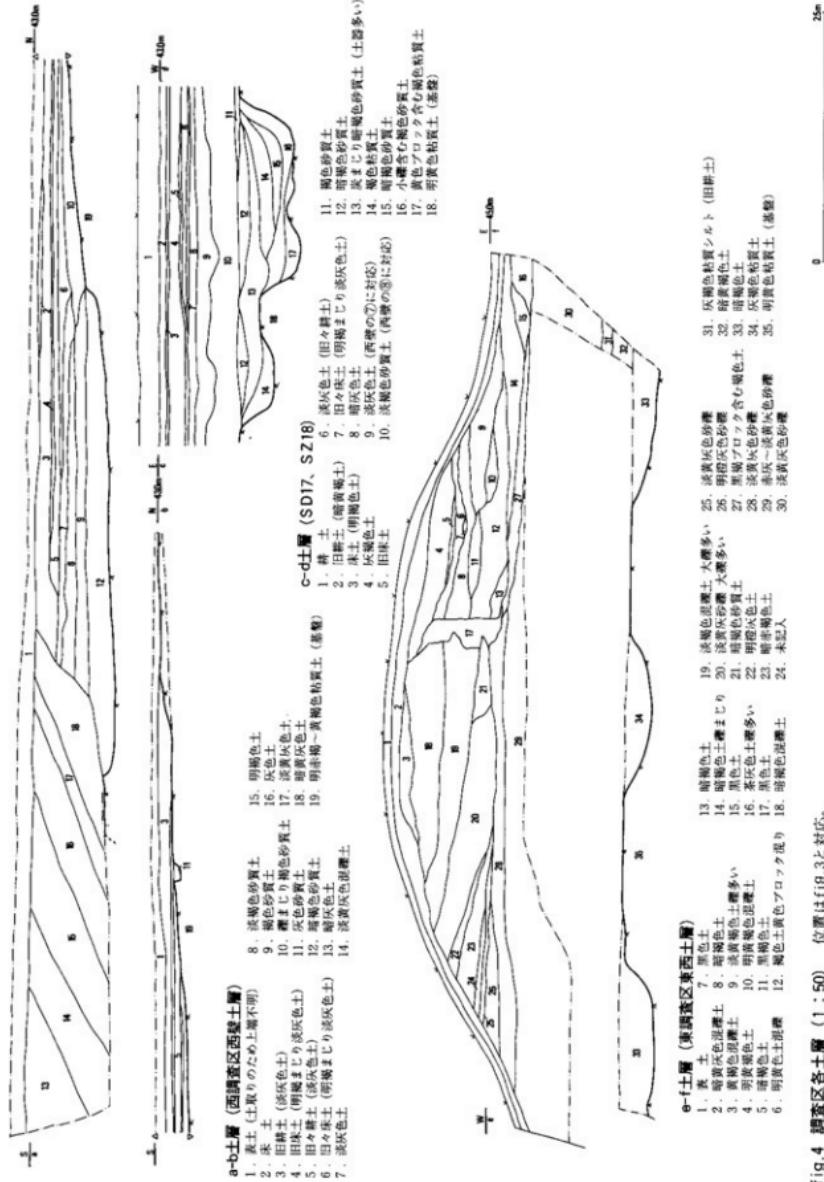


fig.4 調査区各土層 (1:50) 位置はfig.3と対応。

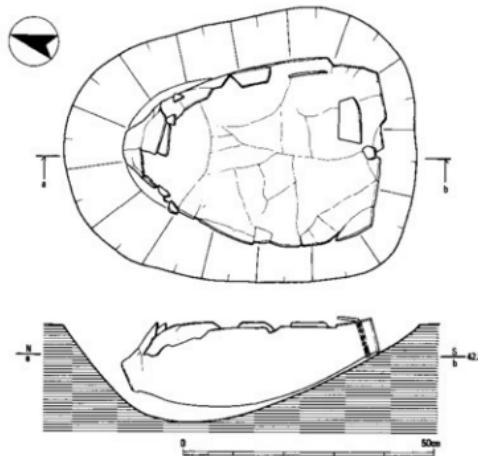


fig.5 土器棺墓SX16 平面・立面図 (1:10)

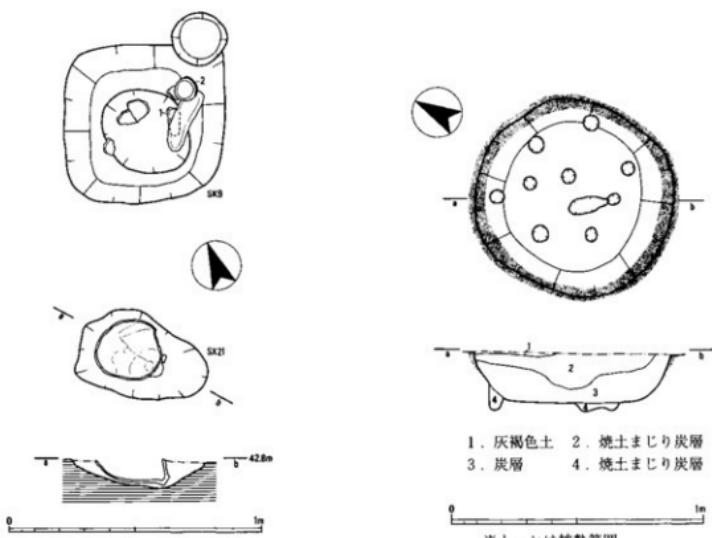


fig.6 土坑SK9、土器棺墓SX21 平面、断面図 (1:20)
※番号はfig. 12と対応。

fig.7 中世墓SX8 平面・断面図 (1:20)

存部の状況からは、蓋のあった可能性は残るが、单棺であったとみなすことができる。墓壙は、土器の大きさに合わせて掘削されたものと考えられ、長軸約0.7m、短軸約0.6m、最深約0.2mが残る。土器の大きさとほとんど変わらない小さな墓壙で、底部側を若干低くして土器を据えやすいように工夫している。墓壙埋土は基盤層とほとんど変わらない明赤褐色系土である。墓壙埋土中にはサヌカイトの剥片が含まれていた。時期は、土器の特徴から晩期後葉頃のものと考えられる。

土器棺墓S X21 (fig. 6) 西調査区のSK9の付近で検出した遺構である。甕を用いた墓であるが、後世の削平のために口縁部が欠損している。そのため、この墓が单棺であったのかどうかの判断はできない。SX16と同様、底部側を低くして据えられている。検出したのは長軸約0.6m、短軸約0.4mであるが、土器の大きさを復元すれば、造作当初は少なくとも長軸約0.7m・短軸0.4m・深さ0.4m以上のものであったと推察される。墓壙埋土は褐色味を帯びた淡赤褐色土である。SX16とほぼ同じ時期のものと考えられる。

b 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構には、堅穴住居のほか、性格不明の溝や土坑・ビットがある。

堅穴住居SH7 (fig. 8) 西調査区の東部北寄りで検出した遺構である。東西約4.6m、南北約3.5mの長方形を呈している。検出面からの深さは標高の高い北側で約0.2mで、床面はほぼ平らといえる。遺構の北西辺は後世の遺構によって破壊されているが、それ以外の部分では、所々途切れるものの壁周溝が全周する。貼床は判然としなかった。中央や北寄りに被熱部分があり、燎跡と考えられる。炉の周囲は直径約0.8mほどのゆるやかな埋みとなっている。南壁東寄りのビット1は床面からおよそ0.35mほどの深さを持つ。やや小さいものの、貯蔵穴の可能性がある。主柱穴は精査を行ったものの、確認することができなかった。出土土器から、中期後葉頃の遺構かと考えられる。

c 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構には、前期初頭の溝がある。

溝SD2・4 東調査区で検出したもので、鎌倉時代の溝SD1を挟んで東をSD2、西をSD4

としているが、恐らく一連のものであろう。

SD2は東西方向に伸びるもので、断面逆台形状を呈する。東端のSX3と重なる部分以東は南の肩が判然としない。遺構の底からやや浮いた状態で甕口縁部が出土している。

SD4は南北に走るものとそれに直行して東西に走るもの(SD2の続き)とでなる。南北に走の方の溝の東肩は比較的明瞭な段を形成している。両者が接続する部分からは、口縁部は欠損するものの、体部はほぼ完形となる甕(いわゆる「バレススタイル甕」)が出土した(fig.9、fig.12-10)。この土器も溝底に密着しているわけではないため、溝の上方にあったものが、溝が埋まりかけた段階で転落してきたものと考えられる。

以上のことから、SD2・4に囲まれた部分は、方形周溝墓に相当する可能性がある。

溝SD5 西調査区の東端で検出した遺構である。深い部分でも検出面から0.2m程度の浅いものである。南北方向に走るもの東にL字状の曲がる状況を示す。この屈曲部のあり方から、仮に溝の北東側が内、西南側が外とすると、溝の外肩は不明瞭で、内肩は外肩よりは明瞭なもの、やはりほど明確なものではない。外肩にはそれに沿うかたちで鎌倉時代以降の細い溝(SD6)が巡っている。埋土の中程から久山期新相の高杯脚部(fig.12-7)が出土している。この溝も方形周溝墓の可能性を残すが、検出状態が悪いため、よくわからない。

d 古墳～飛鳥時代の遺構

古墳～飛鳥時代の遺構には、木棺墓と土器棺墓がある。

木棺墓SX3 (fig.10) 東調査区の南東端で検出した遺構である。北部で溝SD2を切り込む。南北約2.3m、東西約1.5mの長方形の墓壙に南北約1.8m、東西約0.85mの木棺が据えられていたものと考えられる。墓壙は、検出面からの深さでは約0.4mある。木棺痕跡内には小形の須恵器が4点あり、北部に平瓶と高杯が、南部に壺身と壺蓋が、それぞれ埋置されていた。この墓壙を取り巻くような溝は検出されず、古墳ではないと判断される。出土土器から、7世紀前葉頃のものと考えられる。

土器棺墓SX22 (fig.9) 東調査区で検出した遺構である。溝SD4を切り込み、中世と思われ

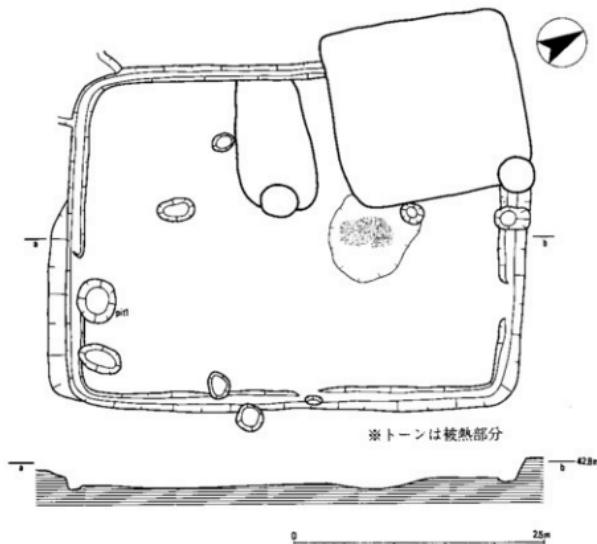


fig. 8 穂穴住居SH 7 平面・断面図 (1 : 50)

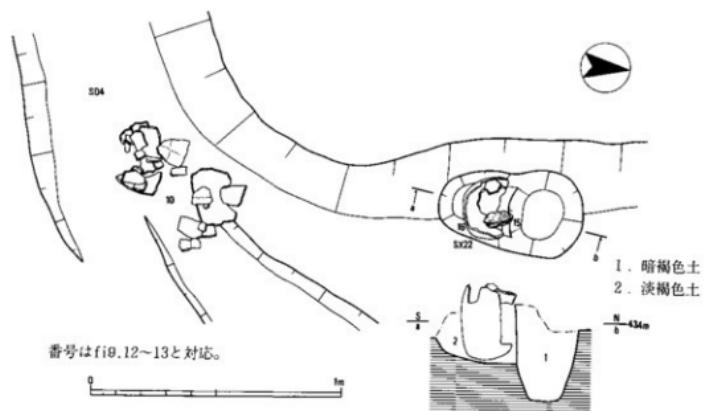


fig. 9 溝SD 4・土器棺墓SX 22 平面・断面図 (1 : 50)

る掘立柱建物の柱穴に切り込まれる。掘立柱建物の柱穴の切り込みにより、土器棺の北半が破壊されている。直径約0.3mほどのピット状の墓壙に、土師器の甕を棺としている。土器は正立状態で埋置されている。棺の口縁部には焼きの悪い須恵器片（提瓶、

fig. 13~15）があり、この破片で土器棺の口を塞いでいたものと考えられる。棺に用いられている土師器甕は外面に煤の付着が見られるものである。出土した土器から、6世紀後葉～7世紀初頭頃のものと考えられる。

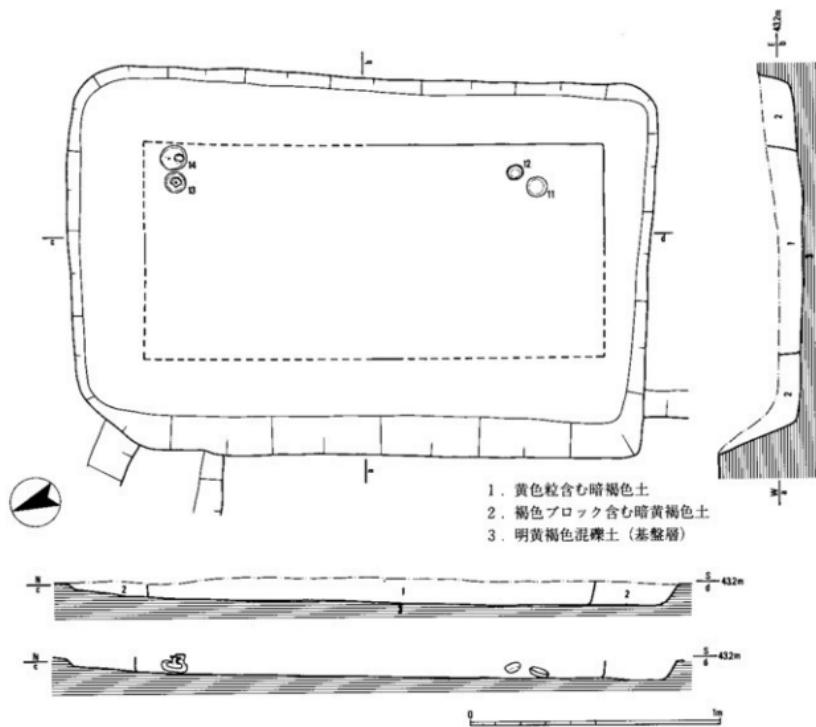


fig.10 木棺墓 S X 3 実測図 (1 : 20) ※土器番号は、fig.13と対応

e 平安時代の遺構

平安時代の遺構には、土坑・溝がある。

土坑 S K11 西調査区中央南部で検出した遺構である。長軸約0.3m、短軸約1.8mの不定形な平面形態で、検出面から約0.2~0.3mほどしか残存していないかった。この土坑の上面から黒色土器碗・土師器杯類が比較的まとまった状態で出土している (P.L.12)。検出時の状況としては、一括廃棄性の高いものと考えられる。

土坑 S Z19・18および溝 S D17 (fig. 3) 西調査区西部で検出した遺構である。それぞれ別の名称を与えていたが一連のものと考えられ、検出時にも3者を切り合上区分することはできなかった。S Z17は平面形が不整な長方形で、一見、堅穴住居状を呈する。しかし、堅穴住居に見られる柱穴・カマ

ドなどの痕跡は見られないため、大形の土坑と考えておく。S Z18の埋土中には若干の焼土を混入する。

f 鎌倉時代の遺構

鎌倉時代の遺構には、溝がある。

溝 S D 1 東調査区で検出した遺構である。幅約2.0mで、調査区内を南北方向に走る。断面は皿状を呈する。埋土中から土師器鍋片 (fig.13-34) が出土している。

溝 S D 6 西調査区の東方で検出した遺構である。古墳時代初頭と考えた溝 S D 5 の外縁部をめぐるように造られている。埋土下層に小窓が多く出ている。埋土中から陶器碗 (山茶碗、fig.13-33) が出土しているために一応この時期と見なしたが、さらに新しい可能性も含んでいる。

g 室町～戦国時代の遺構

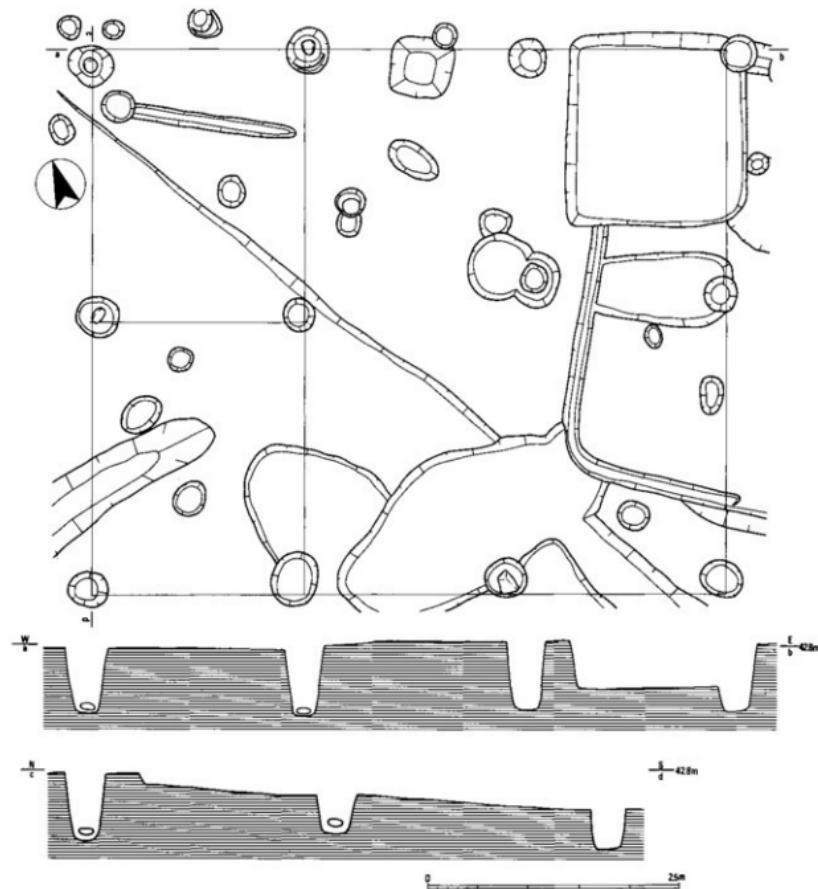


fig.11 堀立柱遺物SB23 平面・断面図 (1 : 50)

室町～戦国時代の遺構には、堀立柱建物のほかにピットなどがある。また、確定できないものの、火葬墓SX8も当該時期のものとして扱う。

堀立柱建物SB23 (fig.11) 東調査区中央付近で検出した遺構である。東西3間 (約6.3m)、南北2間 (約5.5m) の規模である。南北方向の軸線は、N19°Eである。柱間は、東西方向が約2.1m (1尺を30.30mとすると7尺)、南北方向が約2.7

m (同9尺) の等間である。東西棟と考えると、東面の入側柱がなく、西1間が床張りにな可能性が考えられる。

なお、建物北東隅に位置する土坑SK10はこの建物と軸がよく揃っており、この建物に伴う可能性もある。しかし、北面することや、柱間に納まらないことから、建物に伴わない可能性の方が高い。

火葬墓SX8 (fig.7) 東調査区西北部で検出

遺構番号	小地区	旧称	性格	時期	備考
S D1	東区	S D1	溝	鎌倉	
S D2	東区	S Z2	溝	古墳前	
S X3	東区	S K3	木棺墓	飛鳥	
S D4	東区	S Z4	溝	古墳前	
S D5	h2~i4	S D5	溝	古墳前	
S D6	h2~i4	S D6	溝	鎌倉	
S H7	g·h3~4	S K7	豎穴住居	弥生中	
S X8	c2	S K8	中世墓	戦国?	
S K9	f3	S K9	土坑	縄文	
S K10	g3	S K10	土坑	戦国?	
S K11	g4~5	S K11	土坑	平安	
S K12	d3~4	S K12	土坑		
S D13	d5	S D13	溝		S B23と並行
S K14	f4~5	S K14	土坑		
S D15	e4~5	S D15	溝	弥生?	
S X16	c4	S K16	土器棺墓	縄文晩	
S D17	d4~7	S D17	溝	平安	
S Z18	c4~5	S Z18	土坑?	平安	
S Z19	c3~4	S Z19	土坑	平安	
S Z20	b3~4	S Z20	土坑	弥生?	
S X21	f3	pit1	土器棺墓	縄文晩?	
S X22	東区	pit1	土器棺墓	古墳後	
S B23	f3~g4	f3-pit2·4、f4-pit1	掘立柱建物	戦国	2間×3間
S B24	東区		掘立柱建物	鎌倉?	

tab. 1 検出遺構一覧表

した遺構である。直径0.8mの円形を呈し、検出面からの深さは0.2mしか残らない。土坑上端部のみに赤変した被熱部があるものの、それ以外の部分には被熱していない。埋土中から骨片や副葬品は出土しなかった。なお、土坑底部には直径約5cm程度の円形の小穴がいくつか開いており、火葬の際に小杭などを打ち込んで棺などの安定を図った痕跡ではないかと思われる。

h. 時期不明の遺構

時期不明の遺構には、掘立柱建物がある。

掘立柱建物 S B24 東調査区で検出した遺構である。南北2間以上、東西1間以上と想定され、西および北側の調査区外に及んでいるものと想定される。南北方向の軸線は、N 8° Wである。柱間は、東西方向が約1.8m（1尺を30.30mとすると6尺）、南北方向が約3.6m（同7尺と5尺）である。この建物に伴う柱穴が土器棺墓S X22を破壊している状況が観察された。出土遺物がなく、時期は不明とせざるを得ないが、埋土のあり方からは鎌倉時代頃のものではないかと想定される。

V 調査の成果

—出土遺物—

今回の調査によって出土した遺物は、整理箱に換算して11箱と少ない。しかし、少ないながらも各時代の特色ある遺物が確認できた。以下、それぞれの遺物について概要を記す。個々の詳細は遺物観察表(tab. 2)を参照していただきたい。

1 繩文時代の遺物（1～4）

土坑SK9と土器棺墓SX16・SX21から出土している。

SK9からは少量の縄文土器と打製石斧が出土している。図示できる土器は2の底部のみで、明確な時期は不明である。打製石斧は片岩製と思われる。全体を粗く成形したもので、刃部には使用時の磨滅が観察される。

3はSX21の土器棺として用いられていたものである。体部外面には全面に二枚貝条痕と思われる調整が加えられているが、タキメの可能性もある。外面には煤が付着しており、煮炊きに使用していたものの転用であろう。口縁部の欠損が致命的であるが、体部上半がすさまじい傾向にあるため、壺形を呈する可能性がある。愛知県・麻生田大橋遺跡で検出されている土器棺墓との類似から、縄文時代晩期の馬見塚式に並行するものと考えられる。ただし、タキメとすれば、弥生時代中期のものとする。

4はSX16の土器棺として用いられていたものである。縄文伴晩期末頃の突帯文土器である。^⑨この土器は、突帯が極めて退化した状態のもので、刻目はいわゆる「D」字から「O」字の中間的な状態である。口縁端部は外側に肥厚する。体部最大径付近より上には二枚貝腹縁部が原体と考えられる条痕文が見られ、体部下半には上から下に向かって粗いケズリが施される。なお、突帯に刻まれる刻目は体部上半部の条痕と同一原体と思われるもので施されている。

2 弥生時代の遺物（5～6）

堅穴住居SH7から出土したものがある。

5は口縁部が立ち上がる縄頸壺で、中期後葉の範疇で把握できる。

3 古墳～飛鳥時代の遺物（7～16）

前期初頭のもの（7～10）と後期後葉から飛鳥時代のもの（11～16）に大別される。

7～8は欠山期新相に、9～10は元屋敷期古相に、それぞれ相当するものである。

9は、口縁端部下方に素地付加によって拡張を行うものである。口縁部外面に櫛齒状工具による綾杉文を施す。10は、いわゆる「バレススタイル壺」である。口縁部は欠損する。外面上半部には擬凹線文状の櫛描文と櫛齒状工具による鋸齒文・列点文が施される。施文部下端以下から底部にかけては水銀朱と思われる朱彩が見られる。朱彩は、施文部では鋸齒文の原体部分にのみ見られる。体部下半は、底部からやや上がったところに擬口縁を形成してから立ち上げていく手法によって作られており、同時期のS字状口縁台付壺や二重口縁壺と同様な手法によるものと見られる。

15～16はSX22に用いられていたものである。16を棺身、15を棺蓋として利用されていたものと考えられる。15の須恵器は提瓶と考えられるが、焼成は極めて軟質である。16は土師器壺で、体部内面下半には縱方向のヘラケズリが見られる。外面には煤の付着があり、実際に用いていたものを棺身として転用したものと思われる。提瓶の状況から、6世紀後葉頃のものと考えられる。

11～14はSX3に副葬されていたもので、全て須恵器である。11は杯蓋、12は杯身と考えられるが、セットとなるものではない。これらの形態からは田辺昭三氏による陶邑編年のT.K217型式に並行するものと考えられ、7世紀前葉頃のものと思われる。

4 平安時代の遺物（17～32）

SK11・SD17・SZ18などから比較的まとまった資料が出土した。特に、SK11出土の17～19は同一地点からまとまって出土したものであり、一括廃棄と考えてよい。土師器杯・黒色土器碗・灰釉陶器碗およびロクロ土師器皿がある。黒色土器碗は全てA類に相当するものである。19は、外面にはケズリが、内面にはヘラミガキと暗文が、それぞれ施されている。しかし、28のように、内面がハケメのみで

終わっているものも存在する。灰釉陶器碗は尾張・猿投編年の中笠90号窯式に相当するもので、9世紀後半頃の実年代が考えられる。

5 鎌倉～戦国時代の遺物（33～40）

土師器類と陶器類がある。33・34は鎌倉時代に、それ以外は室町～戦国時代に相当するものと思われ

る。35～37は、おそらくは地元北勢地域で作られたものであろう。

註

① 安井俊則ほか「麻生田大橋遺跡」（財愛知県埋蔵文化財センター 1991）のS Z20・47・72などを類似資料として挙げることができよう。

② 鈴木克彦「伊勢湾沿岸地方における凸帯文深鉢の様相—伊勢地方からの視点—」（『三重県史研究』第6号 1990）

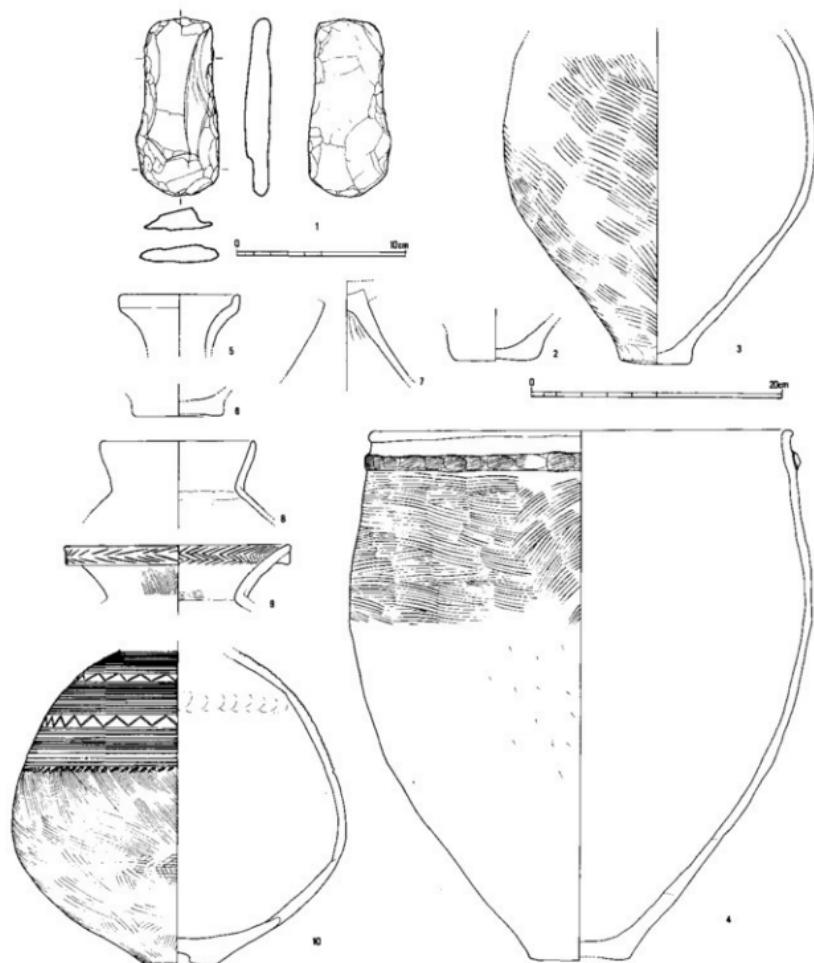


fig.12 出土遺物実測図（1）（1は1：3、他は1：4）

- ③ 伊藤裕作「伊勢・伊賀の弥生後期から古墳前期の土器」(『東海地方土器の移動から見た日本の後・期弥生土器』第3回東海埋蔵文化財研究会 1991) このなかで、弥生後期新招としたものを欠山群古招・古墳前期として提示した上段を新招として扱う。
- ④ 伊藤裕作「古墳時代前期における土器製作技術－伊勢地域における事例を通して－」(『天花寺山』一志町猪野町遺跡調査会 1991)
- ⑤ 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店 1981)
- ⑥ 田中康「古代・中世窯業の地域的特質—畿内—」(『日本の考古学』第6巻 河出書房新社 1967)
- ⑦ 斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心にして－」(『古代の土器研究－律令的土器様式の西東3－』古代の土器研究会 1994)

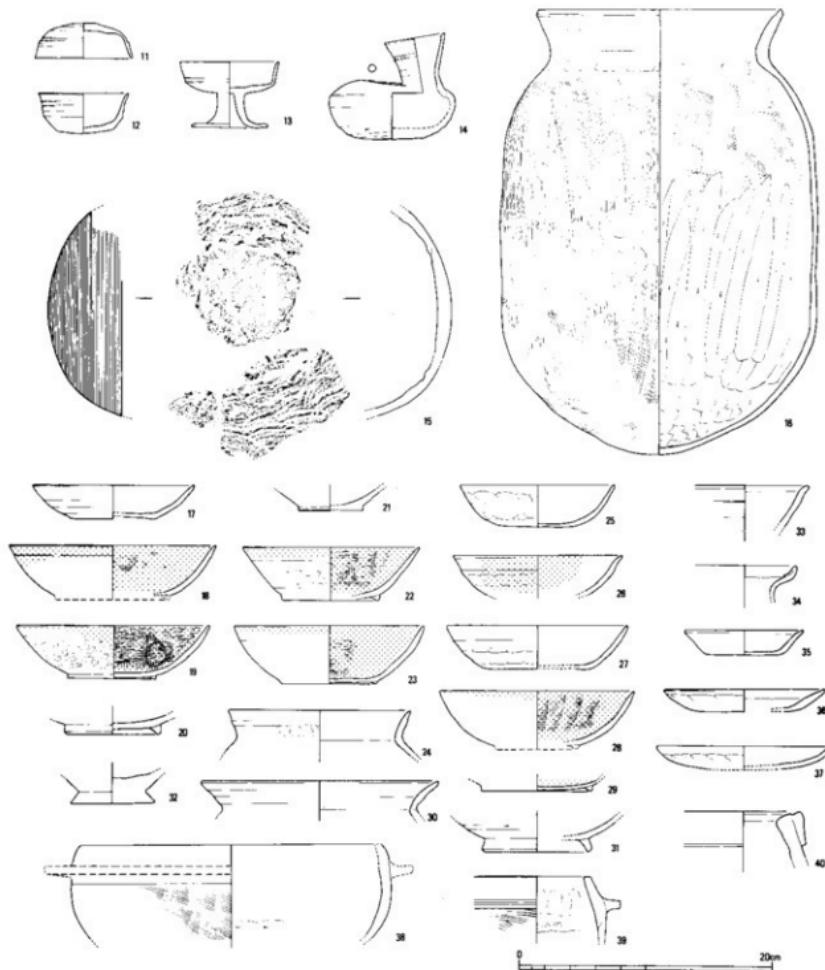


fig.13 出土遺物実測図 (2) (1 : 4)

番号	器種等	出土 グリッド	出土 遺物・層 名など	京上時の 名称	法 量 (cm)	調査・柱法の特徴	地 土	焼 成	色 調	残存度	備 考	
1	打製石斧	f 3	SK 9 s 2	SK 9 (長)10.7 (幅)5.0	外；打製、研磨ナシ 内；使用痕	使用原材； 片岩？	-		完存			
2	縄文土器 底部	f 3	SK 9 p 1	(底) 7.0	外；新縄 内；新縄	粗0.5~3.0mm の小石	軟	淡褐色	底部完存			
3	縄文土器 底部	f 3	SX 2 1 p i t 1	(底) 5.6	外；二枚貝貝殻 内；新縄	粗0.5~5.0mm の小石	軟	暗褐色	体部1/3	表面に焦		
4	縄文土器 底部	c 4	SX 1 6 SH 7	SK 1 6 (口)34.0 (高)42.7	外；ケズリ→二枚貝貝殻 内；新縄	粗0.5~5.0mm の小石	軟	淡褐色	口縁1/3 底部完存	表面に焦、内面下部に 炭化物		
5	弥生土器 底部	g 4	SH 7	SH 7 (口) 9.6	外；新縄 内；新縄	粗0.5~3.0mm の小石	軟	淡褐色	口縁1/5			
6	弥生土器 底部	g 4	SH 7	SH 7 (底) 7.2	外；新縄 内；新縄	粗0.5~2.0mm の小石	軟	赤褐色	底部1/3			
7	土器器 高杯	12	SD 5 重複機	SD 5 (脚柱) 3.4	外；新縄 内；シボリメ痕	密0.5~4.0mm の小石	軟	乳白色	脚柱4/5			
8	土器器 蓋	西区 中央溝	重複機	重複機 (口)12.4	外；新縄 内；剥離	密0.5~4.0mm の小石	軟	乳白色	口縁1/3			
9	土器器 蓋	東区	SD 2	SZ 2 (口)18.2	外；ハケマ→口縁部外側に 縫合文 内；縫合文	密0.5~4.0mm の小石	やや軟	赤褐色	口縁1/2 3片			
10	土器器 蓋	東区	SD 4 南周溝	SZ 4 (底) 5.9	外；ハケマ→周縁部剥離 内；ナメ	密0.5~3.0mm の小石	良好	淡褐色	底部7/10	「パレススタイル」 縫合文と同点より下に影		
11	遺物器 杯蓋	東区	SX 3 p 4	(口) 7.7	外；凹輪ナタ→ハラ切り 内；凹輪ナタ	密0.5~1.0mm の小石	堅	淡褐色	ほぼ完存			
12	遺物器 杯身	東区	SX 3 p 3	(口) 7.2 (底) 3.2	外；凹輪ナタ→ハラ切り 内；凹輪ナタ	密0.5~2.0mm の小石 黒斑	堅	黑色→暗灰	ほぼ完存			
13	遺物器 高杯	東区	SX 3 p 1	(口) 7.8	外；凹輪ナタ 内；凹輪ナタ	密0.5~3.0mm の小石	堅	淡褐色	ほぼ完存			
14	遺物器 平底	東区	SX 3 p 2	(口) 4.9 (高) 8.4	外；凹輪ナタ→凹輪ケズリ 内；凹輪ナタ	密0.5~3.0mm の小石 黑斑	堅	淡褐色→暗灰	ほぼ完存	表面に自然軸 体部上にボタン状序文		
15	遺物器 振子	東区	SX 2 2 p i t 1	-	外；カキメ 内；同心円タキメ痕	粗0.5~4.0mm の小石	軟	暗褐色→ 黒斑	体部1/3	発泡施錠、瓦質		
16	土師器 長脚甕	東区	SX 2 2 p i t 1	(口)19.4 (底)35.5	外；セザンヌ→カネコ→コロナ 内；セザンヌ→ウタゲズミ→ミコナ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	暗褐色	体部3/5	外側に焦		
17	土師器 杯	g 4	SK 1 1 S K 1 1	(口)12.8 (底) 2.7	外；剥離 内；剥離	粗0.5~2.0mm の小石	軟	白茶灰	口縁3/4 2片			
18	黑色土器 瓶	g 4	SK 1 1 S K 1 1	(口)16.3 (底) 8.4	外；剥離 内；ハケマ	密0.5~1.0mm の小石	やや軟	淡茶灰 黒斑	口縁1/4	八朝		
19	黑色土器 瓶	g 4	SK 1 1 S K 1 1	(口)15.6 (底) 4.3	外；ケズリ→ヨコナダ 内；ミガキと縫合文	密0.5~1.0mm の小石	やや軟	淡茶灰 黒斑	9/10	八朝		
20	灰釉陶器 瓶	c 2	灰陶土	灰陶土 (高台) 7.7	外；ロクナダ→ヨコナダ 内；ロクナダ	密0.5~1.0mm の小石	坚	白灰	高台1/4			
21	土器器 杯	c 5	SZ 1 8 S Z 1 8	(底) 5.2	外；ロクナダ 内；剥離	密0.5~1.0mm の小石	やや軟	淡茶白	底1/4	ロクト土器器		
22	黑色土器 瓶	c 5	SZ 1 8 S Z 1 8	(口)14.2 (底) 4.3	外；ケズリ→ヨコナダ 内；ミガキ	密0.5~3.0mm の小石	やや軟	淡茶灰 黒斑	口縁1/4	八朝		
23	黑色土器 瓶	c 5	SZ 1 8 S Z 1 8	(口)15.4 (底) 4.8	外；剥離 内；ミガキ	密0.5~2.0mm の小石	軟	淡茶灰 黒斑	口縁1/2	八朝		
24	土器器 瓶	c 5	SZ 1 8 S Z 1 8	(口)14.4 (底) 2.3	外；オサエ→ヨコナダ 内；剥離	密0.5~2.0mm の小石	軟	淡茶系	口縁1/8	外側に傷付有		
25	土器器 瓶	d 5	SD 1 7 SD 1 7	(口)12.2 (底) 3.4	外；オサエ 内；剥離	密0.5~1.0mm の小石	軟	淡褐色 明褐色	1/3			
26	黑色土器 瓶	d 5	SD 1 7 SD 1 7	(口)19.4 (底) 3.4	外；オサエ→ナード→ヨコナダ 内；剥離	粗0.5~4.0mm の小石	やや軟	淡褐色 黒斑	口縁1/8	八朝		
27	土器器 杯	d 5	SD 1 7 SD 1 7	(口)14.4 8.8	外；オサエ→ヨコナダ 内；ロクナダ	密0.5~3.0mm の小石	やや軟	淡褐色	口縁1/6			
28	黑色土器 瓶	d 5	SD 1 7 SD 1 7	(口)15.4 8.6	外；オサエ→ナード→ヨコナダ 内；ハケマ	密0.5~2.0mm の小石	やや軟	明褐色 黒斑	口縁1/5	八朝		
29	黑色土器 瓶	d 5	SD 1 7 SD 1 7	(高台) 8.6 8.6	外；剥離 内；剥離	密0.5~3.0mm の小石	やや軟	明褐色 黒斑	高台1/3	八朝		
30	土器器 瓶	d 5	SD 1 7 SD 1 7	(口)18.8 8.6	外；ヨコナダ 内；ヨコナダ	密0.5~1.0mm の小石	やや軟	淡茶灰	口縁1/8	外側に傷付有		
31	灰陶器 陶瓶	d 5	SD 1 7 SD 1 7	(高台) 8.8 8.8	外；ケズリ→ヨコナダ 内；ロクナダ	密0.5~1.0mm の小石	坚	淡褐色	高台1/4			
32	土器器 瓶			(高台) 6.8	外；凹輪ナタ→系切り 内；凹輪ナタ	密0.5~4.0mm の小石 滻丸	良好	明褐色	口縁9/10	ロクト土器器 下代遺跡200mで探採		
33	青器 瓶	i 3	SD 6 SD 6	(口) 1-	外；ロクナダ 内；剥離	密0.5~1.0mm の小石	堅	淡褐色	口縁部分 山茶柄			
34	土器器 瓶	東区	SD 1	SD 1 (口) 1-	外；剥離 内；剥離	粗0.5~1.0mm の小石	軟	淡褐色	口縁部分	奈伊勢系		
35	土器器 小皿	東区	中世以降 盛土	1号噴射 土器 盛土	(口) 9.5 (底) 2.0	外；ナード→ヨコナダ 内；ナード→ヨコナダ	密0.5~1.0mm の小石	軟	淡茶灰	口縁1/4		
36	土器器 皿	東区	中世以降 盛土	1号噴射 表探	(口) 12.8 (底) 1.8	外；オサエ→ナード→ヨコナダ 内；ナード→ヨコナダ	密0.5~1.0mm の小石	やや軟	淡褐色	1/8		
37	土器器 皿				(口)13.8 1.8	外；オサエ→ナード 内；剥離	粗0.5~2.0mm の小石	やや軟	淡茶灰	口縁1/6	東区の東約50mで表探	
38	土器器 羽釜	f 3	p i t 3	p i t 3 (口)24.0	外；ハケマ 内；ナード→ケズリ	密0.5~3.0mm の小石	やや軟	淡茶灰	口縁1/8	外側に傷付有		
39	土器器 羽釜	西区	重複機	重複機 (口) 1-	外；ハケマ→ヨコナダ 内；オサエ→ハケマ	密0.5~2.0mm の小石	やや軟	淡茶灰	口縁部分	外側に傷付有		
40	陶器 皿	東区	表探	(口) 1-	外；凹輪ナタ 内；凹輪ナタ	密0.5~2.0mm の小石	堅	淡褐色	口縁部分	蜜滑		

tab. 2 出土遺物観察表

V 調査のまとめと検討

「居敷1号墳」の調査からはじまったこの調査は、新たに居敷遺跡を確認することになった。そして、縄文時代から戦国時代にまでに及ぶ時期の遺構群が当地に展開していることが判明するに至った。

今回の調査区では、各時代毎の遺構密度は決して濃いわけではない。それでも多種多様な遺構・遺物が確認されている。この報告書の最終章として、今回の調査で明らかになったこと、そして新たに提起された問題について、わずかばかりの言及を行うことをとする。

1 縄文時代晩期の遺構と遺物について

縄文時代晩期に相当する遺構として、土器棺墓が2基確認された。これは、鈴鹿市域では北一色遺跡に次いで2遺跡5・6例目、旧鈴鹿郡以北の、いわゆる北勢地域では6遺跡10・11例目となる⁹。この状況から、北勢地域における縄文時代晩期には、土器棺という墓形態が、概略普遍的な墓形態として受け入れられていると認識して大過なかろう。

棺に用いられている土器はいわゆる突帯文土器であり、このうち、口縁部付近にのみ突帯の認められる、いわゆる「1条突帯」の類に相当する。三重県下の晩期突帯文土器を絶観した鈴木克彦氏によれば、中勢地域の当該時期には「2条突帯」が分布し、西日本の状況となる傾向が指摘されている。この視点から言えば、居敷遺跡周辺は東海地方（非西日本的）のなかにおける土器群としての位置づけが必要といえる。しかし、1条か2条かにかかわらず、体部の屈曲点を境として上部に条痕文、下部にケズリ、という手法上の共通点は北・中勢を通じて認められることである。このような、異質性と共通性との複合状況のなかで、当該土器が持つ意義を検討していく必要がある。

また、今回の土器棺墓のうち、S X16については単棺であったことが確実である。このような形態は、近畿地方ではよく見られるものの、三重県内ではほとんど実例のないものである。その意味でも、縄文晩期における墓形態の地域色を見ていくうえで、この資料は重要といえる。そして、上記の突帯文に見られる地域色と墓形態との相関関係も検討課題とい

える。

S X21の土器棺使用土器についても興味深い。口縁部の欠損は残念というほかないが、外面の条痕文の状況や土器の形態などから、いわゆる突帯文系統の土器ではなく、伊勢湾東岸部以東に分布の見られる土器群との共通性が窺われる。当該時期の伊勢は統じて突帯文土器の分布が認められるのであるが、近年では、大安町宮山遺跡でも櫛王式に相当する土器を用いた土器棺墓が検出されている¹⁰。この時期は、土器としては「縄文晩期」の系譜なのであるが、時代区分的には弥生時代との境界が微妙である。このような時期において今回認識された東海東部地方との関連は、今後の検討によっては極めて重要な意義を持つこととなろう。

2 弥生時代の遺構について

今回の調査で確認できた明確な弥生時代の遺構は中期に属する竪穴住居1棟と土器棺墓1基がある。これらの遺構を、当遺跡周辺における他の弥生時代遺跡の状況と併せて考えると、非常に興味深い事実と問題が提起できる。

居敷遺跡は標高約43m前後の丘陵台地上に位置する遺跡なのであるが、当遺跡から約150mほど南の標高約25mの低段丘上には中～後期の遺跡である下代遺跡¹¹が存在する。さらに今年度の調査により、下代遺跡の南約600 mの、鈴鹿川が形成した自然堤防上に中富田西浦遺跡が確認されるに至った。すなわち、1 km内外の極めて狭い範囲に①丘陵上、②丘陵裾、③低地という、3様の遺跡が認められると言う事実が浮かび上がってきたのである。

これまでの弥生集落の展開としては、弥生前期から継続する大規模集落（拠点集落）からの核別れとして中・小規模集落（周辺集落）を把握してきた。また、酒井龍一氏によるセトルメント・パターンとしての集落配置の関係も考慮されている¹²。これらの指摘は正鶴を射たものと評価でき、このような関係を考慮していくなかで弥生時代のあり方を究明する糸口になるかと考えられる。これに従えば、居敷・下代・西浦の遺跡は「周辺集落」として位置づけができるものと評価できる。

しかし、これら3遺跡のあり方は、3様の立地という事実と極めて近接した場所に形成されているという事実を突き合わせた場合、3遺跡間同士の極めて密接な結びつきが想定できるのではないだろうか。すなわち、「拠点集落」の対話をとしての「周辺集落」の位置づけとともに、「周辺集落」における相互補完的な状況も、これら3遺跡のあり方から窺い知れるのである。何らかの目的により、同一集団が3様の場所へ居住区を設定していた可能性を考え、「周辺集落」における多様な生業活動の存在を想定しておきたい。

3 古墳時代前期の遺構と遺物について

古墳時代前期に相当する遺構は、居敷遺跡の北に近在する津賀平遺跡からも確認されており、居敷遺跡を含めた広域な遺跡群として把握されるべきであろう。

古墳時代前期としては溝状の遺構が確認されたにとどまるが、それは方形周溝墓の可能性も想定された。そこから、いわゆる「パレススタイル壺」が出土地している。三重県下での「パレススタイル壺」の分布には特に顯著な傾向こそ窺えないもののあまり多くは出土しておらず、当該時期における特殊な土器としてみておいて大過なかろう。このような土器が、古墳時代前期半ば以降、前方後円墳が多く分布する当該地域の前史として存在していることに注意したい。

4 古墳時代後期～飛鳥時代の遺構と遺物について

古墳時代後期から飛鳥時代に相当する遺構としては土器棺墓と木棺墓が確認された。このうち、木棺墓S X 3から出土した土器は極めて小形であるという特徴を持つ。このような特徴は、鈴鹿川流域における須恵器の地域的な特徴であるものと考えられるが、具体的な検討はさらなる資料の充実を待ちたい。

なお、当該時期の集落遺跡は、津賀平遺跡で確認されている。津賀平遺跡を形成していた集団による造墓と考えられるのではないだろうか。また、この墓以前に形成されていると思われる、近隣の津賀古墳群や蟻越古墳群などと同じ立地条件下にこのような墓が形成されているという事実も興味深い。

5 平安時代の遺構と遺物について

平安時代の遺跡は、津賀平遺跡が良好である。ここからは八稜鏡や石帯が出土しており、当該地域における中心的な集落であることは間違いない。

居敷遺跡の当該時期の遺構は土坑等があるのみであり、津賀平遺跡の縁辺部と認識して大過あるまい。

土坑等から確認されている黒色土器類は、全ていわゆるA類に相当するものである。共作する灰陶陶器から黒雀90号壺式に相当する時期と思われ、それは9世紀後半頃の実年代が与えられている。このなかには、19のような比較的精緻なもののはかに28のように内面をハケメ調整のみで終える粗雑なものもある。前者は上記の津賀平遺跡のような律令的色彩の強い集落からの何らかの影響により、当遺跡に持ち込まれたものと推察されるが、後者は当該地域周辺の地域色が出たものと考えられる。鈴鹿市を含めた北勢地域における黒色土器の動向は明確には判明していないものの、粗雑なもの的存在は、当地域にこのような土器を生産していた集団の存在を想起させる。

6 中世の遺構について

中世の遺構としては掘立柱建物や溝があるが、それらに有機的なまとまりは見出し難い。しかし、遺跡範囲内に当該時期の遺物散布が認められることから、fig.2 に示した遺跡範囲内に薄いながらも広がっているものと想定される。

今回調査を行った「居敷1号墳」については、下層から検出された鎌倉時代の遺物を包含するSD 1の存在から、それ以降の造作と考えられる。この盛土は、「居敷1号墳」から東に向かって約50mほど延びている。

この造作時期については、近代に行われた当地の開墾による可能性を残すものの、当地が「居敷」という字であることから、城館に伴う土塁の可能性も考慮しておきたい。これには、現在「津賀城跡」とされている部分との関連を考慮しなければならない。

現在言われている津賀城跡は、台地から派生する尾根上にこそあるものの、その両側にはさらに規模の大きい尾根（蟻越古墳群と居敷遺跡のある丘陵）がある。すなわち、「城」部分の回りが尾根によって取り囲まれている状況なのである。このような条

件は、城の防御性としては極めて不都合なものと考えられる。

現在比定されている津賀城跡部分には、堀に相当するような遺構の存在が指摘されている。このことから、この場所に城が存在している可能性は否定できない。ここで、上述の城の防御性を考慮すれば、居敷遺跡の部分に何らかの城郭関連遺構が形成されていたことも充分考えられるのである。

以上のことから、居敷遺跡の範囲は、あるいは城郭に関連した遺構が展開する範囲と把握できる可能性を含むと考えておきたい。

以上、居敷遺跡の調査によって得られたことと、そこから提起される問題点について述べてきた。大きくは、縄文時代と古墳時代の、「墓城」としての当地、弥生時代と平安時代の「集落城」としての当地、中世の城館の可能性を含めた集落としての当地、ということになろうか。ただし、今回の調査区はまさに遺跡の縁辺にあたるため、遺跡の実態はいま少し複雑であろう。それでも、このような限られた調査区内でこれだけの成果が認められたことに、当遺跡の重要性があると認識されよう。

註

- ① 真田幸成『北一色遺跡発掘調査概要報告』（鈴鹿市教育委員会 1968）
- ② 三重県埋蔵文化財センター「一般国道475号線東海環状自動車道発掘調査ニュース」No.4(1995)
- ③ 鈴木克彦「伊勢湾沿岸地方における凸亜文深鉢の様相—伊勢地方からの視点—」（『三重県史研究』 第6号 1990）但し、鈴木氏は「少なくとも中村川流域では」と限定されている。
- ④ 中村義二「土器棺墓よりみた近畿地方縄文晩期後半の地殻色について」（『滋賀考古』第10号 1993）
- ⑤ 註③と同じ
- ⑥ 三重県埋蔵文化財センター「三重県埋蔵文化財センター年報」6(1995)
- ⑦ 武末純一ほか「農村の誕生」（『古代史復元』4 弥生農村の誕生（講談社 1989）
- ⑧ 酒井龍一「セトメントアーケオロジー」（ニュー・サイエンス社 1990）
- ⑨ 田中琢「古代・中世窯業の地域的特質—畿内—」（『日本の考古・古字』第6巻 1967）
- ⑩ 斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産～猿投窯を中心～」（『古代の土器研究～律令の土器様式の西東3～』 古代の土器研究会 1994）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	い じき いせき はつくつ ちょうさほうこく						
書名	居敷遺跡発掘調査報告						
副書名							
卷次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	134						
編著者名	伊藤裕作						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503 TEL05965(2)1732						
発行年月日	西暦1996年3月31日						

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
い じき いせき 居敷遺跡	みえけんすずかし 三重県 鈴鹿市 つがちょうあごいじき 津賀町字居敷 (但し、遺跡番号 は居敷1号墳)	24207	市915 県10091	34° 52' 50"	136° 31' 40"	1995.6.12~ 1995.8.9	590	県道辺法寺加 佐登停車場線 国補道路改良 工事に伴う事 前調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
居敷遺跡	墓 集落	縄文晩期	土器棺墓2基	深鉢	一条突帯文深鉢の单棺 東海東部的な土器棺
		弥生中期	堅穴住居1棟	土器	
		古墳前期	溝	朱彩バレススタイル壺	方形周溝墓の可能性
		古墳後期~ 飛鳥	土器棺墓、木棺墓	土師器・須恵器	木棺墓出土の須恵器は 極めて小形
		平安中期	土坑	土師器・黒色土器 灰釉陶器	北勢地域における黒色 土器の良好な資料
		戦国	掘立柱建物1棟	土師器	城館跡の可能性

PLATE



S X 16 (東から)



遠景（南から）



「居敷 1号墳」近景（西から）

「居敷1号墳」



調査風景（西から）



土層（南東西から）

東調査区下層全景



東部（南から）



中央部（南から）



全景（南から）



北部の土器（南から）



南部の土器（南から）

P L . 5

S
D
4
•
S
X
22



S D 4 遺物出土状況（南から）



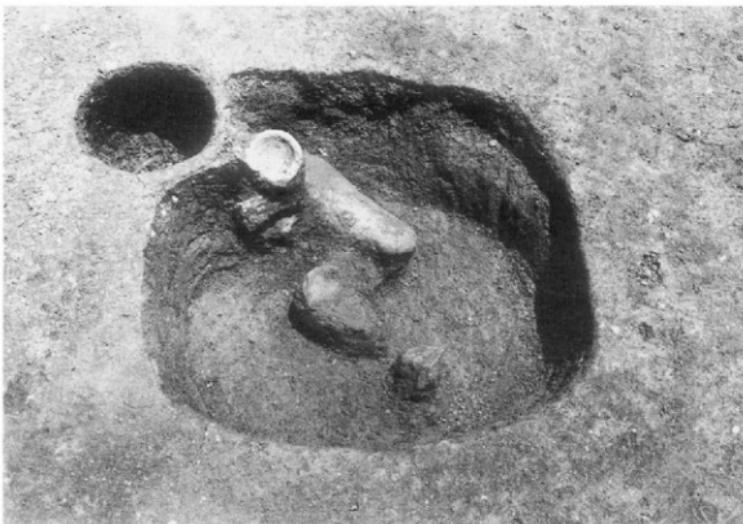
S X22 (東から)



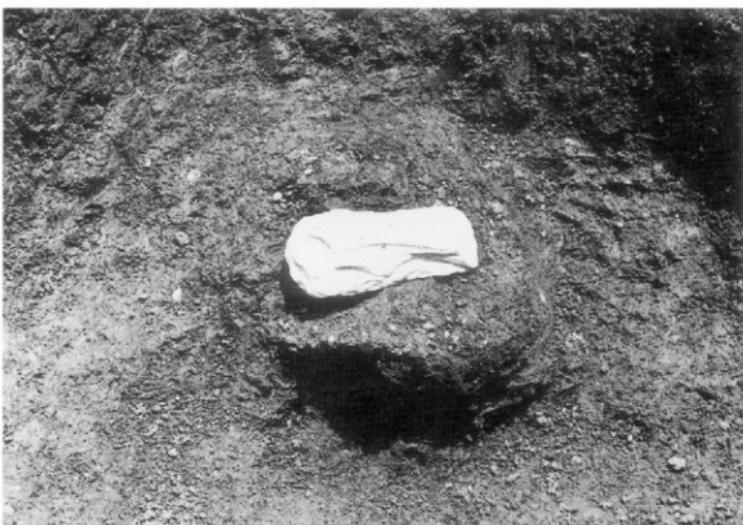
東から



西部（北西から）



全景（西から）

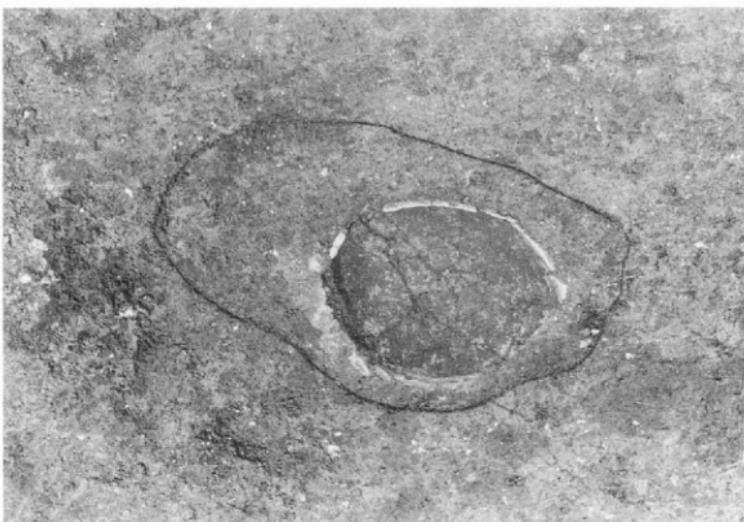


打製石斧出土状況（西から）

面加5



面加5



SX21

P.L. 8

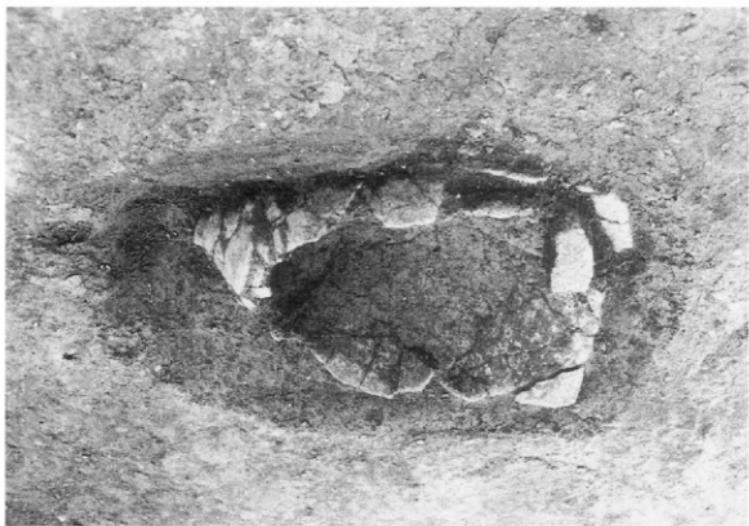
北九 5



北九 5



東九 5



SX16

P L. 9

面加5



北加5



S 7

P L. 10



S D 5 (南から)

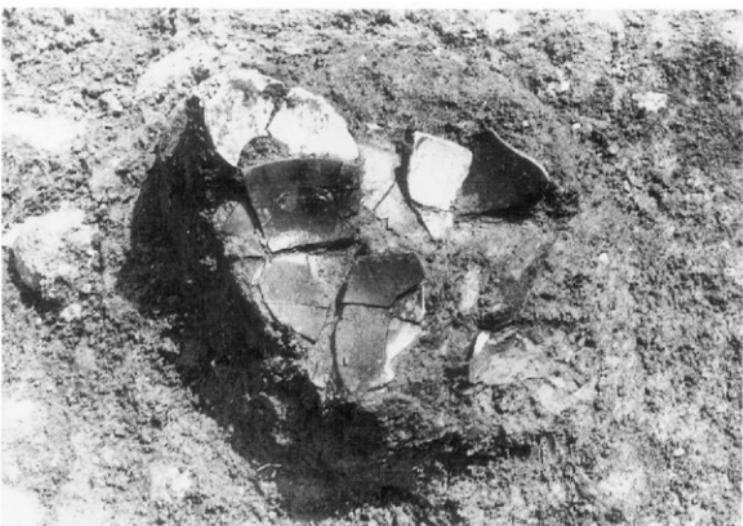


作業風景

S D
17
• S Z
18
• S K
11



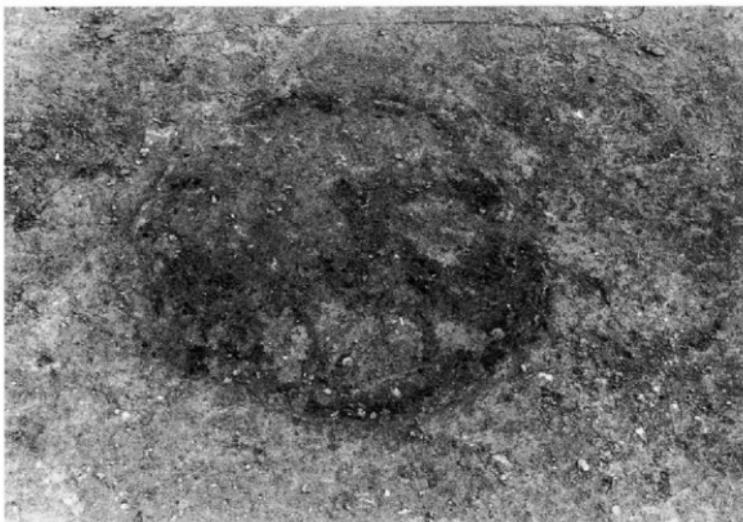
S D 17 • S Z 18 土層（北から）



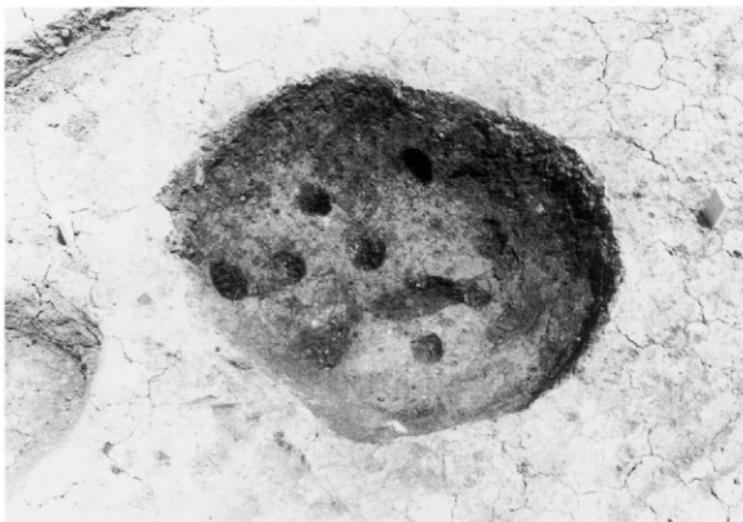
S K 11 土器出土状況（北から）

P L.13

S X 8

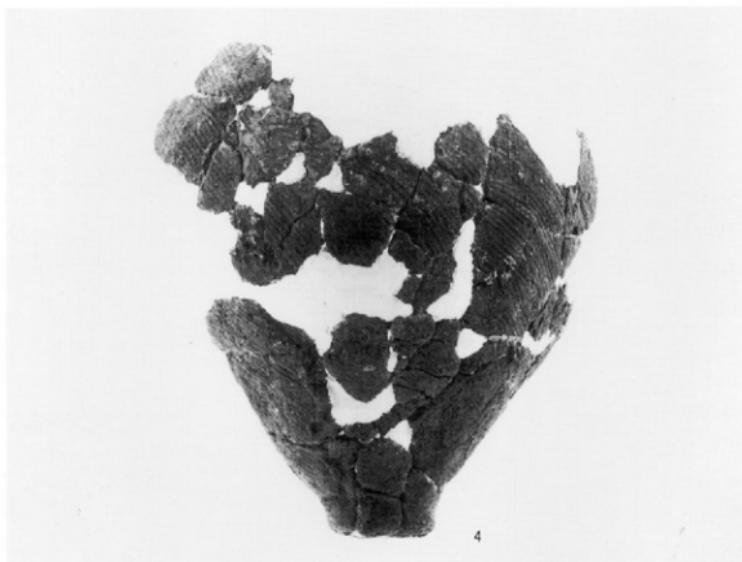


検出状況（南から）



西から

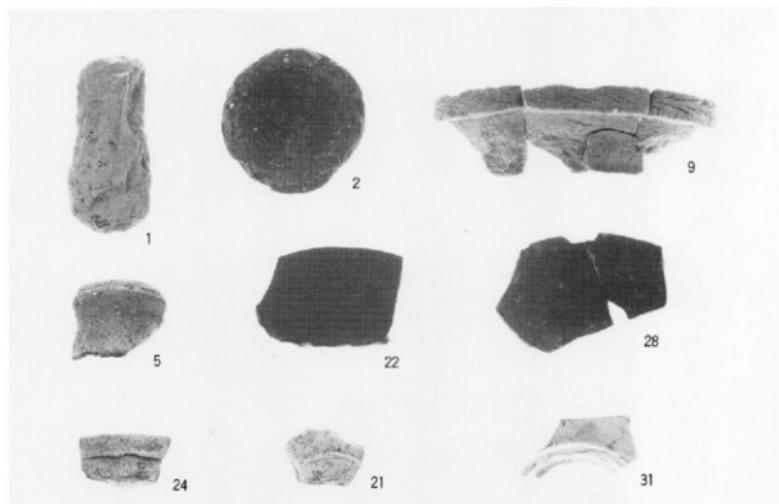




4



10



平成 8(1996) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 6 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 134

居敷遺跡発掘調査報告

— 鈴鹿市津賀町字居敷所在 —

1996・3

編集発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 東海印刷株式会社
